

勝林寺々報

無明の闇を破するゆえ
智慧光仏となつげたり
一切諸仏三乗衆
ともに歎賞したまえり



阿彌陀如来さまを「智慧の光の如来さま」とお釈迦さまはおほめになつております。(「大無量寿経」)

お釈迦さまがそのようにおたえなさるのには並でない理由があつてのことです。

「智慧」の反対は「無明」です。「疑い」です。「愚痴」です。「煩惱」です。

「光」の反対は「闇」です。

阿彌陀如来というほとけさまは、そのほとけさまとは全く反対なところにいる「無明煩惱」の私、「愚痴無知」な私、「疑いの闇の城」にたくなにたてこもつている私にはたつきかけられるための如来さまなのだとお釈迦さまは言つておられるのです。

真如真実に対して目が見えないばかりか、かたくなに目をつぶつて暗い自分一人の世界にたてこもつて居る者。愚か者のがんな疑心。そのような者の闇をくだき目をさまし疑をはらつて信をおこさすなどということは、とても考えられないことです。

おそらく、衆生を救うためにこの世にあられたどんな仏も菩薩・修道者(三乗衆)も考えおよびも思ひおよびもできなかつたこととす。

救いのための何らかの手がかり足がかりをみつげ出してそれではじめて、それぞれに対応した救いの道を示していかれたのです。

それが今は何の手がかり足がかりもないばかりか、むしろどんな救いにも目を閉ざし背をむけている私がいるのです。

諸仏・菩薩・三乗衆、いかなる方々の智慧も力も及ぶべくもありません。その及ぶべくもない者をこそと願行くださるはとけが阿彌陀如来さまです。

諸仏菩薩の願行に超え世に超えたことが、しかしいま南無阿彌陀仏とはたらいてくださつてあるのです。

「智慧光仏」という字の左側に親鸞さまは次のように書きつけられました

一切ノ諸仏ノ智慧ヲ集メタマエルユエニ智慧光ト申スナリ

如来さまからいちばん遠いところにいる者。真実如からいちばん遠い虚偽の世界にうづくまつて居るもの。親のまことのところを愚かな疑いごころで拒否し通して居るもの。その者をこそ救わねば願行し、願行することによつて阿彌陀仏となつてくださったこの智慧光仏。

諸仏・菩薩もあらゆる修行者たちも、すべて一時舌をまき、そしてやがてそれぞれ舌をのべてこの世に超えた阿彌陀さまの願と行とをたたえはめるのです。

「大無量寿経」をはじめとして多くの経に、阿彌陀様のお徳を讃嘆し、阿彌陀さまのことをお説きになるお釈迦さまをも歎賞(ほめたたえる)しておられます。

むしろ諸仏菩薩さまがたは、阿彌陀様の考えることもできないおはたらきを讃えることがお仕事であるようです。

一切諸仏ノ仏ニナリタモウコトハ、コノ阿彌陀ノ智慧ニテナリタモウナリ

と親鸞さまは左訓なさつています。

如来のことと徹底した智慧の光のはたらきの前に、無明を断たれ闇を破られて、もうのがれることも出来なくなつた私が疑うごころ・はからうごころをふりすて、如来の真実のまことのなかに生れかわらせていただいたその私をも、諸仏菩薩三乗衆、百重にも千重にもとりまいてよろこび護りたまうのだと親鸞さまはおよろこびなさつて居るのです。

ご恩うれしや

「あの世にゆく日が 来なけりやいと 歳になつたら だれでも思う 早いもんだね 八十を過ぎて 今日も達者で生きて居ることは 仏様の おかげです ねてもさめても お念仏

「ゆうべ尊いご縁に遇うた 何度聞いても 覚えていない こんな愚かな私じやけれど 知つて居るぞよ 見ぬいて居ると 親のお慈悲が」といひてみれば 愚痴も言わずに 今日一日は

三笑い話で すませぬ慈悲に 口じや言えない 言葉も出ない 涙ぐんでは ご恩にむせび 思わずとならる 南無阿彌陀仏 おかけおかげと 喜びながら ご恩報謝の お念仏

「娘よ」の節であつてみて下さい。 今年春彼岸会に津屋山の照臨寺におまいりましたら、ご法座でお同行みなさんが唱和なさつていました。鳥取のおばあさんが作詞されたとお聞きしました。

出石組念仏奉仕団
六月四日(水)五日(木)
参加費 一万参千円
勝林寺仏仕仏婦研修旅行
六月七日(土)八日(日)
参加費 貳万貳千円
募集要項が回つています。
大至急お申込みください。

五月のこよみ

- 一日 平田専福寺水代経・基幹運動本部 専門委員会(本山)
- 二日 専福寺水代経・赤砂妙道寺水代経法話 専福寺法事・瀬口長一氏宅法事・横山 梅乃氏宅法事
- 三日 田中啓治氏宅法事・田中保夫氏宅法事 成田健明氏宅法事
- 四日 東保福寺法事・中嶋喜久雄氏宅法事 宮崎幸彦氏宅法事
- 五日 出石組役員打合せ 神戸照光寺仏婦総合法話・出石組坊守 会
- 六日 斎藤照義氏宅法事・五日会 沢田春吉氏宅法事・十日講
- 七日 十二日教区教推企画室会議 中央連研講師研修会(本山)
- 八日 同
- 九日 十六夜会
- 十日 後藤高志氏宅法事 教区総合企画室会議
- 十一日 降誕会
- 十二日 三十三日・二十八日 本山研修会参加
- 十三日 長寿寺法事
- 十四日 教区教化推進協議会委員会
- 十五日 網干組ご巡教
- 十六日
- 十七日
- 十八日
- 十九日
- 二十日
- 二十一日
- 二十二日
- 二十三日
- 二十四日
- 二十五日
- 二十六日
- 二十七日
- 二十八日
- 二十九日
- 三十日
- 三十一日

五月二十一日 降誕会
「降誕会(こうたんえ)」は浄土真宗をお開きになつた親鸞聖人のお誕生をお祝いする行事です。聖人のお生れは承安三年(一一七三)四月一日で、十一日にお祝いの降誕会をとりまします。
ご本山では「観能会」などいろいろ楽しい催し物をして毎年この五月二十一日をお祝いしています。



戒律



「ご門徒さんはいいねえ、修行もいらん百万遍大念仏も不用、何もせんでもまるごとのお救いじやそうな。塙断ち・くさいもの断ち、何も不要。毎朝のお茶湯も放つたらがしてええそうな。」

「そのまま来い、凡夫のままで来い、悪人正機とは、また何と気楽結構なご宗旨ではないか」

「門徒もの知しずというて、何も知らん何もせん、悪のまま煩悩のまま、そのまま昼寝でもしているうちのおたすけじやそうな」と、

他の宗教の人が言うのならカラスの勝手といえずともできようが、どこそこ寺のご門徒と自ら思っている浄土真宗のお念仏者が、しかし案外とこんな思っているのはありますまいか。

浄土真宗は仏教のなかの真実の宗教です。仏教にはもと「七仏の通戒」といつて、これをはずせば仏教ではないという大原則があります。「モロモノノ悪ヲナスコトナカレ。モロモノノ善ハ善シデ行ナエ。ミスカラソノ意ヲ浄クスル、コレゾ諸仏ノ教工仏教ナル」

仏教には戒律ということが昔からいわれております。「戒」とはシイラ、自分の行動を慎しむ自戒することです。「律」とは集団と社会の規律ルールでマビナヤといえます。

「悪人をこそ」と願われ、「煩惱のままで」と呼ばれている声が聞こえてきたら、悪人は悪人であることに気づき煩惱の身であることにはじめてめざめます。

この浅ましい凡夫をこそとはたらいてください親ましますと知らされたとき「よしそれならば親まかせ人まかせ、業あるのだから思うさま悪をつのろう。昼寝でもしてよう」となるでありましょうか。

「いかにしても浅ましい私であるけれども、その私をだいてくださる親のなかで、このもつたいたい私。せめては慎しませてもらわねば、つとめさせていただかねば」と、ほんとの意味での「戒律のくらし」が流れ出てこなければ申しわけないではありませんか。

「お前は自分のことより考えていない。」「あなたこそ人のことをかまつたらんと、自分のことをもつとしやんとしたらどう」

言われてみれば、そんなに人のお世話もろくしできていないばかりか、かんじんの自分の仕末がほとんど出来ていない私であるように思います。自分というものが、ちゃんと確立していません。まに人のことをしようとするから、なんだかひんまがつたおせつかいや干渉や強制をやつてしまうのではないかと思うのでございます。

たとえば、自分以外の人のことを思うとき何といても我が子のことでしよう。

ところがその子どもを思う思いよりもいろいろあると思います。親のエゴイズムによる片寄つた親の一人よがりの思い方になつていて、場合が多いよいに思います。「親のための子ども」を願つているように思います。

仏のお念

秋 干 嶋 宮 嶋 千 秋

してみると私には、真実人と思うところを本当の「まごころ」「信心」のころを持つことはとうてい出来ないように思います。

いつかのお聴聞に、「あなたは信じたいことに命をかけることが出来たか」と問われたことがありましたが、子どもの為の親のいのちをさしげられる程であるならば悪い子も恐らく出来

ないでしょうが、しよせん私の「まごころ」などというものは、しかしそんなまじなものではないように思います。「まごころ」「一心」「信心」などというものは神や仏に対する場合はもちろん、人間関係の中でも私にはあるはずのないことかと最近つくづく思うのでございます。

真宗の信心をうたつたといわれる「恩徳讃」に如来大悲の恩徳は、身を粉にして報ずべし。師主知識の恩徳も、骨をくだきても謝すべし。とありますが、あれは、阿彌陀如来さま・尽十方無碍光如来さま・不可思議光如来さまの、私に対する一心なおもい。向うからご信心くださつて、私にむかつておがんでくださる、その如来さまからのご信心に気づかせていただいた時の驚き。身も心も骨の髄までゆるがすばかりの感激を申しのべられたのがこの「恩徳讃」ではないかと、このごろいただいているのです。

やさしい心



シツタルタ太子 (お釈迦さまの名) は、父・浄飯王や義母マハーパジヤーパテイーその他の人々の慈愛をいっぱい受けて大きくなつてゆかれました。

ある年の祭りの日、お祭りを見物に

生涯

なげなく田んぼの方に目をやりました。掘りかえされた土の中から、もぐらやみみずなどの小さな生き物が出たり入つたりしてました。すると、空からサツと大きな鳥が舞いおりて鋭いくちほしでそれをくわえてゆきました。あわれな小動物は、きつと鳥のために殺されることでしょう。

太子は、生きものたちが互に争いあう姿をみて心から悲しまれました。そして、動物も人間も、どうしたら争いがなくなるだろうかと深く考えこまれました。

シツタルタ太子はすくすくと大きくなつてゆかれました。学問もいっしょけんめいにされました。武術のうで前も大したものであつたと伝えられています。もう立派な青年です。

太子は十九歳になられました。そろそろお嫁さんをもらう年ごろです。太子は、ヤシヨードラー姫という美しいお姫さまと結婚されました。太子とヤシヨードラー姫とはしばらくの間夢のような楽しい日々をお送りになりました。しかし太子は、このような楽しい生活が一体いつまで続くのか、自分たちだけ楽しい生活をしていて果してこれでよいのかとお考えになるようになりしました。

四門出遊

太子の心の雲は次第次第にひろがつてゆきました。父の王は夏冬雨期の三つの宮殿をつくり美

い侍女たちを集め、毎日歌や踊りせちそうで太子の心を浮き立たせようとされました。しかしだめでした。

太子は一人でビクニツクに出かけられました。はじめ城の東門を出たときしわだらけの老人と出会い、次に南門から出たときは悲しみにつゝまれた病人を見、西門から出たときは引きかえされました。そして最後に北門から出たとき、質素だが気高く堂々とした求道者に出会いました。「これこそ本当のしあわせを知っている人ではないのか」とそのとき太子の胸は高鳴りその日一日はたのしく過ぎました。

うまみを失わない葡萄のたき方

- (材料) 葡萄・調味料(しょうゆ・み)(たきかた)
1. 掘りたての葡萄なら皮をむき、イボイボをていねいに除き適宜なおおききに切る。
 2. たつぷりな水から中火で時間をかけて炊く
 3. 水が沸騰してしばらくしてからしょう油で吸物味程度に調味する。
 4. 水がなくなるまで炊きこむ。(炊き上りは白い粉をふくが葡萄のうまみはにがずに炊けます)
- ＝掘りたてから時間の立つた葡萄の場合。
 1. 皮をむかないでまるのまま(切らずに)、米糠一つまみを入れてゆがく。
 2. ゆがいた湯がひえるまでそのままナベに置く。
 3. その後、皮をむいてから普通に炊く。

葡萄の甘皮の酢の物

1. あま皮(葡萄の中の白いやわらかな皮)を三センチほどに切る。(必ずタテに千切りに)
 2. サツと歯切れよい程度にゆがく。
 3. 二杯酢である。
4. 木の芽をちらす。

